



走竜国
の
第三王女

～きまじめルシィは隣国の中尉に翻弄される～



フィリップ

ヒックス王国の中尉。
ヒックス王国で唯一の走竜乗り。
真っ直ぐな性格。

アデラ

レーイン王国の王女。
ルジの母。

ゾーフロウ

レーイン王国の王配。
ルジの父。

ルジィ

レーイン王国の第三王女。
凄腕の走竜乗り。
きまじめな性格。

登場人物紹介



クレイグ

ヒックス王国の公爵。
クラリスの夫。



クラリス

ヒックス王国に嫁いだ。
ルシの姉。



デニス

ヒックス王国の
第一王子。



メルヴィン

レーン王国の侯爵令息。
ルシの元婚約者。



マルグリット

ヒックス王国の
侯爵令嬢。



走竜国 の 第三王女

～きまじめルシィは隣国の中尉に翻弄される～

Contents

第一章	出会いと旅立ち	6
第二章	ヒックス王国での日々	50
第三章	砂州 <small>さす</small> のワニ	91
第四章	動き出す想い	120
第五章	火花	141
第六章	救助	167
第七章	ルシィの決意	182
幕 間	マルグリットと王太后グラディス	218
第八章	走竜乗りの女性たち	225
幕 間	国王の視察	239
第九章	ルシィ、母になる	248
番外編	フィリップが愛した女性 <small>ひと</small>	260
番外編	マルグリット、結婚式にルシィを招待する	264
番外編	クラリスが戦う理由	269
番外編	ルシィと老いた走竜	275

★第一章 出会いと旅立ち

ルシイは急ぎに急いでメルヴィン・ルーデンの屋敷にやってきた。

約束もしていないし先触れも出してない。会える時間も限られている。急いで出てきたから淡い茶色の髪は簡単なハーフアップだが、服は肌の色が映えるベージュを選んだし、ピアスは瞳の緑色と同じ翡翠ひすいを選んだ。

メルヴィンに会いたくて公務の合間に駆け付けたのに、出迎えた婚約者は戸惑った顔をしている。「ルシイ……急にどうしたの？」

「最近会えていなかったから、仕事をやりくりして出てきたの。先触れも出さずに来てしまったけど、予定があった？」

「いや……。忙しいのに来てくれてありがとう。今日は馬で来たんだね」

「だって、メルヴィンはリユートを怖がるじゃない」

「違うよ。リユートが僕を嫌っているんだ」

ルシイは強がるメルヴィンを微笑ほほえましく眺めた。

メルヴィンは半年前に成人した十八歳で、ルシイの五歳年下だ。温厚な性格も、まだ線の細さが残っている体格も、金の髪に青い瞳も全てがルシイの目には好ましく映る。

メルヴィンが言う走竜のリユートは、別にメルヴィンを嫌っているのではない。率直に言えば、

リユートは自分を怖がっているメルヴィンを甘く見ているのだ。だがもちろん、そんなことをメルヴィンに言うつもりはない。

走竜のリユートは二足歩行の肉食の動物だ。大きく裂けた口、鋭い歯、強大な顎、太く逞しい後ろ足、武器にもなる長い尻尾^{しっぽ}。

世界中で唯一、このレーイン王国だけが走竜を繁殖させ、飼い慣らし、軍属の乗り物として使っている。起伏の激しい土地では、馬よりもよほど便利だ。

「一緒に海岸まで散歩しない？ 気持ちのいい風が吹いているわ」

「うん、行こうか。ただ……今日はサシヤが遊びに来るんだ。庭の花を見たいらしくて。サシヤも一緒にいいかな」

「サシヤ？ もうこちらに向かっているの？」

声を出さずにコクリとうなずくメルヴィンを見て、華やいでいたルシイの気持ち急速にしぼんでいく。

ルシイはサシヤが苦手だ。サシヤはメルヴィンと同じ十八歳。怖がりで非力で華奢な、貴族令嬢の見本みたいな娘だ。そしてメルヴィンの幼なじみである。

ルシイはこの国の第三王女で、十五歳から忙しく公務をこなしている。二人の姉が嫁いだ後は、姉たちが担っていた公務を全て引き継いだ。

ルシイが公務を始めた頃のメルヴィンは十歳だった。メルヴィンは急にルシイと会えなくなった

ことを寂しがっていた。当時のメルヴィンはルシイに会うと「僕のことを嫌いになったの？」と不安そうに尋ねるような繊細な少年だった。

そんなメルヴィンもいつしか同年代の集まりに参加するようになり、気がついたら頻繁に「サシャ」という名前がルシイとの会話に出てくるようになった。

それをこの国の女王である母アデラに言えば、大ごとになるのはわかっていた。

だからルシイはサシャのことも、メルヴィンとの距離が少しずつ開いていることも、両親には何も言えずにいる。

そんな状態だからといって五歳年上の自分がメルヴィンを責めて「幼なじみにも嫉妬する年上の女」と嫌悪されるのは絶対に避けたかった。それはあまりに情けない。

そうこうしているうちにメルヴィンはルシイと手をつなごうとしなくなり、挨拶のハグも極力体が触れ合わないような奇妙なものになった。

（素っ気ないのはきつとそういう年頃のせい。今だけよ。そのうち私の方を向いてくれるはず）

そう自分に言い聞かせていたが、そう思うほど逆に惨めになった。

婚約していることも、メルヴィンが生まれたときからの婚約者であることも、メルヴィンの心をつなぎ止められていない。ルシイの直感がそう騒ぎ立てるようになってから数年が過ぎた。

不安のあまり、隣のヒックス王国に嫁いだ長姉クラリスに手紙を書いたことがある。

サシャとメルヴィンの様子を書くときはかなり穏やかな表現をしたつもりだったが、急ぎで届けられた返事には姉の怒りが滲んでいた。

『今すぐメルヴィンとサシヤの双方に釘を刺しなさい。王家の顔に泥を塗るような真似をしたら、二人だけでなく彼らの家族全員も罰を受ける。その覚悟があるのかと聞くの。それでもだめならお母様に正直に事情を話しなさい。手遅れにならないうちに動くのよ』

それを読んでもルシイは動かなかった。王家の権力を振り回してメルヴィンとサシヤの付き合いをやめさせても、根本が解決しなかったのだ。

(メルヴィンの顔だけを無理に私に向かせたところで、メルヴィンの心は私を見ないだろう。形だけの夫が欲しいわけじゃない。私はメルヴィンに、共に手を取り合つて同じ方を向いて歩く夫になつてほしい)

ルシイは、メルヴィンがいつもルシイの意見に気を遣い、自分の意見を主張しないことを物足りなく思っていた。

王女の婚約者として、堂々と自分の意見を言つてほしい。ルシイの意見に同意するだけのメルヴィンは、本音で自分に向き合っていないのでは？ とさえ思っている。

だがそう思う一方で、(メルヴィンはまだ十八歳だから、これから期待すればいいのかも)とも思う。そう思うと「もつとしっかりしてほしい」とは言いにくい。

精神的には頼りなくはあったが、メルヴィンの体格はここ数年で少年から大人の男性へと急激に変わっている。

「ルシイの身長を追い抜いた」

そう言つて喜んでいたメルヴィンの嬉しそうな顔は、思い出の中の宝物だ。

懐かしい思い出に浸りながら花壇をほんやり眺めていると、サシヤを乗せた馬車が到着した。

サシヤが着ている袖のないドレスは、彼女の腕の細さと肌の白さを際立たせている。サシヤの手足は細いのに胸の膨らみは豊かだ。

最近、ルシイの前では無口で無表情なメルヴィンが、別人かと思うような柔らかい笑みを浮かべてサシヤを出迎えた。ルシイは「あつ……」と声を出しそうになるほど驚いた。

（最近の不愛想な態度はあの年頃特有の気難しさなのだと思うけど、今でもあんな優しい顔ができたのね）

自分はもう長いこと、あんな笑顔を向けられていない。心が傷ついたものの、自分が傷ついていることをメルヴィンには気づかれたくない。自分でもちっぽけでくだらない感情だと思う。

（私、情けなくて惨めな見栄を張っている。でも、どうしたらいいのかわからない。ああもう、こんな自分が大嫌いよ）

サシヤがメルヴィンに笑顔を向けてからルシイを見た。サシヤの目の中に、一瞬、勝ち誇った色が浮かんだ気がしたが、見間違いだと思うことにした。そうでもしないとみっともなく取り乱してしまいそうだった。

サシヤの真っ白な肌に目が行ってしまう。ルシイはほぼ毎日リユートに乗っているし、軍の訓練にも頻繁に参加している。だからどれだけ気をつけていてもうっすらと日焼けをしている。走竜乗

りとして鍛えられた体に贅肉ぜいじくはなく、引き締まっていた。

細く強い自分の体は好きだったが、久しぶりにサシヤを見ると、（私の体は無骨に見えるのではないか）という気弱な疑問が心に浮かぶ。

「こんにちは、サシヤ」

「ルシイ様、ご機嫌麗しゅう。どうしましょう、ルシイ様がいらっしゃるのでしたら訪問を遠慮しましたのにお二人の時間を邪魔したこと、お許しくださいませ。私はすぐに帰ります」

「いいのよ。今日は私が約束もなしに訪問したの。サシヤは約束していたのでしょうか？」

サシヤは困ったような笑みを作りながらメルヴィンをチラリと見て無言。メルヴィンも床を見て無言。気まずい沈黙に耐えられなくなったルシイが口を開いた。

「三人でおしゃべりすればいいじゃない？」

「まあ、よろしいのですか？　ありがとうございます、ルシイ様」

（今、一瞬だけ、メルヴィンは迷惑そうな顔をしなかつた？）

ルシイの胸の中にモヤツとした感情がゆっくり湧いてくる。

するとルシイの視線に気づいたメルヴィンが笑顔で提案した。

「三人だから三角陣をやろうか」

三角陣は古くからある卓上の遊戯で、メルヴィンに三角陣を教えたのはルシイだ。

メルヴィンは卓上の遊戯に関してだけは負けず嫌いで、子供の頃はルシイに勝つまで何度でも挑戦してきた。

ほんやりと十年以上前のことを思い出しながら三角陣をしていると、サシヤがすぐに負けそうになった。何度も繰り返し弱音を吐く。そのたびにメルヴィンがそれとなく次に駒を進める場所をほのめかす。

卓上の遊戯は次第に、ルシイ対メルヴィン・サシヤ組のようになってきた。

ルシイが本気を出せば、この遊戯でサシヤとメルヴィンに圧勝することができる。そしてそれをやったらどんな空気になるのかはわかっている。

手ひどく負けて落ち込むサシヤ。サシヤを慰めるメルヴィン。そんなものは見たくない。

(あのまま公務をこなしていればよかった)

忙しい公務を前倒しで片付け、時間をやりくりして訪問した結果がこれである。

何度も「無理を言つて悪いわね」と文官たちに謝つて城を出てきたのに。

(おしやれをして訪問した私は道化のようだ)

椅子から立ち上がり、自分を見上げる二人に笑顔を見せた。「帰るわ」と言つて足早に玄関に向かうと、メルヴィンが追いかけてきた。

「ルシイ！ ルシイ！ 待って！」

無言で振り向くと、怯えを含んだ若者の顔がそこにあつた。

「悪かった。サシヤを帰すべきだった。ルシイの思いやりに甘えてしまった。どうか怒らないでほしい。心から謝罪する」

「怒つてないわ。急ぎの公務を思い出しただけ。見送りは結構よ。また今度ね」

また今度という言葉を聞いて、メルヴィンがホツとしている。

ルシイは馬に乗り、城の下まで一気に走った。同行してきた護衛兵士たちが慌てるほどの速さで馬を走らせた。

（私が欲しいのは謝罪じゃないのよ、メルヴィン）

だがその言葉を口にしてしまえば、自分とメルヴィンの関係が「王女と家臣」に変わってしまうことを、ルシイは知っていた。

翌日、ルシイは城の下に広がる森に出かけた。お気に入りの場所で滅入っている気持ちを変えたかった。

森の中の小さな広場は、メルヴィンと二人で何度も出かけた思い出の場所だ。森の中を進み、もう少しでその広場というところで、声が聞こえた。必死に何かを訴える若い女性の声だ。

「メルヴィン様、本当のお気持ちを教えてください！」

「何も聞くな。僕は生まれたときからルシイ様の婚約者だ」

「それはわかっております。でも、お二人はどう見ても姉と弟ではありませんか。メルヴィン様、お願いです。私と逃げましょう。二人で力を合わせて遠くへ……」

「それはできない。そんなことをすれば、僕と君の家族が罰を受ける。わかるだろう？」

「ううっ」

「サシヤ、泣かないでくれ。僕にはどうしようもないことなんだ」

木の陰からそつと覗くと、小柄で華奢なサシヤが顔を覆って泣いている。そしてメルヴィンがその細い体を抱きしめていた。

ルシイはそつとその場を離れた。

(あの広場は私とメルヴィンの思い出の場所なのに。よりによってなぜそこにサシヤを連れてきたの？ なぜあの広場で愛をささやくの？)

裏切られた恨みよりも、「自分とメルヴィンの大切な思い出の場所を汚された」という怒りの方がはるかに強い。

森からまっすぐ城に帰りながら、腹を括った。

(もう無理。現実から目を逸らし続けるのは、もう無理よ。メルヴィンとのことは、ここまで。全てを終わりにしよう)

そう決めて母の執務室を訪れた。人払いをした上で、ルシイは父と母に切り出した。

「メルヴィンとの婚約を解消したいと思います」

父は「意外なことを聞いた」という顔になった。

「待てルシイ。今なんと？ 婚約を解消すると言ったように聞こえたが」

「はい。そう申し上げました」

「メルヴィンがやつと成人したのだぞ？」

ルシイの父で王配のジョフロウは慌てているが、その隣では母であり女王のアデラが険しい顔でルシイを見つめている。

「メルヴィンが成人したからです。ここで婚約を解消せずに結婚したら、私は一生後悔します」

「だがルシイ、お前はずつとメルヴィンと結婚するつもりだったろう？　メルヴィンが生まれた時から、あんなに仲良くしていたではないか」

「ええ。仲良くしてきました。まるで姉と弟のように。お父様、姉と弟は夫婦になれないのです。いつもは温厚な父、ジョフロウが顔を赤くして立ち上がった。

「自分がどれだけ勝手なことを言っているか、わかっているのか！」

「わかっております。申し訳ございません」

「謝って済む話ではない！」

母アデラが父の腕にそっと手をかけた。

「あなた、落ち着いてください。ルシイ、何か理由があるのでしょう？　ついこの前まで婚礼の儀

式で着るドレスを、嬉しそうに眺めていたじゃないの」

ルシイは下を向いたまま、何も言わなかった。

「急にそんなわがママを言えば、お前が罰を受けることになるのよ？」

「罰を受けます。メルヴィンは悪くありませんので」

「そう……。決意は固いのね。わかったわ。婚約の解消を認めます。その代わり、お前には罰を与えます」

「なっ！　君まで何を言い出すんだ！」

「メルヴィンは重鎮の息子です。こちらから願った婚約をこちらから解消する以上、ルシイに罰を

与えないままではルーデン侯爵家への申し訳が立ちません。婚約の解消を認める代わりに明日、お前は国を出なさい。何があっても二年間は戻らないように」

見つめ合う親子。静まり返る室内。最初に口を開いたのはルシイだ。

「わかりました。今夜の晩餐会ばんさんかいはいかがいたしましたでしょうか」

「客人のために第三王女の役目を果たしなさい」

「はい。ではこれからリュートに別れの挨拶をさせていただきます。わがままを聞き入れてくださり、ありがとうございました」

そう言つて去つていくルシイを見つめるアデラ。アデラの肩を抱くジヨフロウ。二人はしばらくして同時にため息をついた。

本当のことを言えば、夫婦はルシイが婚約解消を申し出た理由に見当がついていた。いつかこうなるような気もしていた。

一方、部屋を出たルシイは唇を強く噛んで歩いていた。

あの広場での言葉を聞くまではメルヴィンとの婚姻を楽しみにしていた。今はギクシャクしていても、自分の未来はメルヴィンと共にあると思つていた。いや、思うようにしていた。

(あんな言葉を聞いてしまった以上、もうメルヴィンと元の関係には戻れない)

走竜の飼育舎に入ると、多くの走竜が柵から顔を出してルシイを見た。

大きな口と鋭い牙の前を通り過ぎて、リュートのいる場所までやってきた。走竜の中でもひととき



わ大きな体のリュートが「カカカツ」と喜びの声を上げ、首を上下に振る。

「リュート、海まで行きましようか」

そう言いながらあぶみ鍙と手綱を装着すると、リュートは太く長い尾を揺らして喜んだ。

リュートは数いる走竜の中でも、ひととき美しい走竜だ。腹以外の皮膚が鮮やかに青い。背骨の上は一段と濃い青だ。その青い皮膚の上に、白い斑点が全身に散っている。腹はうつつすら青みを帯びた白。

美しいのは色だけではない。走竜の体は、獲物を狩ることに特化した機能美の塊だ。

ルシイはひらりとリュートにまたがり、足で合図を送った。

リュートは太い脚と重い体に似合わず、タッタッタツと軽快に飼育舎の中を走り抜ける。

外に出ると一気に加速して、あっという間に切り立った崖の縁にたどり着いた。

崖は不慣れな者なら目がくらむ高さだ。ルシイはしばらくの間、崖の上から下の景色を眺めた。

第三王女のルシイにとつて、走竜は自分の価値を見出せる数少ない存在だ。

上の二人の姉は王族としての資質に優れ、他国の王族や高位貴族に嫁いだ。嫁ぎ先では円満で、母国の役に立っている。

それに比べて自分は国から出ることはない。メルヴィンを愛しているからそれでもいいと思っていたが、肝心のメルヴィンは自分を愛していなかった。

弟のモーリスが成人すれば、ルシイはいずれ公務からも離れることになる。

自分には何も無い。その思いがずっと心に影を落としてきた。

(走竜乗りとして優れていることだけが、姉弟四人の中で私が秀でていたことだった)
気難しいリュートが自分にだけは特に懐いてくれる。それが嬉しく、リュートが可愛い。自分の分身のようにさえ思ってきた。

リュートはベテランの走竜乗りさえも振り落とすような気の強い個体だが、ルシィにだけは甘えてくれるし従順だ。自分の存在意義を実感させてくれる愛しい相棒である。

今ではルシィがリュートを操る腕前は、『軍人並み』のレベルを超えている。それなのに。

「メルヴィンとの結婚を諦めたら、リュート、あなたとも離れることになったの。ごめんね。私がいなくなっても、ちゃんとご飯を食べて運動するのよ」

そう声をかけ、ルシィは崖の上から下を眺めたまま風に吹かれている。

レーイン王国の別名は走竜国。その王城はテンプルのような高い台地の上にある。台地の周囲はほぼ垂直な崖だ。王都は崖下にあり、街の外側には森が広がっている。

「リュート、行こう」

「カカッ」

崖には階段が刻まれているが、リュートは階段を使わない。崖のところどころに顔を出している岩棚に足をかけながら飛び降りていく。はたから見れば落下しているようにしか見えない荒技だ。

短時間で崖を下ったリュートが、かなりの速度で街道を進む。道を歩く人や馬は慣れたもので、素早く道を譲る。

すぐにキラキラと陽光を反射する海が見えてきた。

リユートは海岸の波打ち際を走り、大きな岩に飛び乗り、飛び降りた。リユートははつきりと嬉しそうな表情をしている。

心の中に渦巻く鬱屈した思いを晴らすように、リユートと共に波打ち際を走り続けた。

途中までは自分たちが見られていることに気づかなかつたが、走っていたリユートがピタリと動きを止めて風の匂いを嗅ぎ始めた。

ルシイが周囲を見回すと、大きな岩の上に髪が長く背の高い男が立って、こちらを見ていた。

リユートが身構えているのを感じて、ルシイは優しくその首を叩いた。走竜の皮膚は、ザラリと
して硬い。

「大丈夫よ、リユート。見慣れない人だけど、危険ではなさそう」

岩の上にいる男がヒョイと砂地に飛び降りた。背中の中ほどまである長い髪は濃い灰色で、動きに合わせてサラサラと肩から流れ落ちている。男はリユートを恐れる様子もなく近寄ってきた。

(こんなに長い髪の男性、初めて見た)

「やあ、お嬢さん、見事な腕前だね」

「子供の頃から走竜に乗っているの、扱いには慣れているの」

「俺はフィリップ・ステグナン。君は？」

そう言ってこちらを見上げる瞳は青緑色だ。(きれいな瞳。視力が良さそう)と、つい走竜乗りの視点で観察してしまう。

リユートがじれったそうに足踏みをした。

「私の名前はルシイ。ごめんなさい、ステグナン様。この子とは今日でお別れなの。だから、たくさん走らせたのです。失礼しますね」

ルシイが軽く頭を下げ、次の瞬間には走り出した。

フィリップはあつという間に小さくなっていく走竜とルシイの後ろ姿を見送った。

「あの方が第三王女のルシイ姫か。確かもうすぐ結婚だったな」

「クカカカツ」

人間ではない声がしてフィリップが素早く振り返ると、走竜の一団がいた。その数は十数頭。乗り手には女性もいて、全員が軍服を着ている。

砂浜ゆえに、彼らが近づいてくる足音は風と波の音でかき消されて聞こえなかった。フィリップは（これが戦場なら、俺はもう死んでいたな）と思う。

先頭にいる走竜乗りの男性が声をかけてきた。

「この浜辺は走竜の運動場を兼ねております。散歩はあの松の木の間でお願いします」

「そうでしたか。気づかずに立ち入って申し訳なかった」

そう言ってフィリップは海岸から離れた。そのまま街道を歩き、城を目指した。

かなり歩いて城の下に着き、長い階段を上がる。その途中で頂上を見上げた。はるか上まで九十^つ九折^らりの階段が続いている。

「城は切り立った崖の上だし走竜はうじゃうじゃいる。まさに鉄壁の守りだな」

フィリップ・ステグナンは東の隣国、ヒックス王国軍の中尉だ。

ヒックス王国の軍人は通常、馬に乗る。だが数年前に前国王の意向で、一頭の走竜をレーイン王国から買い入れた。去年その前国王が亡くなり、王子が即位した。その新国王が希望して、もう一頭走竜を買い足すことになった。

フィリップがレーイン王国まで走竜を買い付けに来たのは、彼がヒックス王国でただ一人の走竜乗りだからである。そうは言っても、まだ走竜に乗り始めて一年半。ルシィ姫や先ほどの走竜乗りの動きを見れば、自分がまだまだ走竜乗りとして未熟なことを自覚させられた。

今ヒックス王国にいる走竜シエラは、「数いる走竜の中でも氣立てがよくて躰しづも完了ししている」と言われていた。だが乗りこなせたのはフィリップだけだった。

ヒックスの国王はフィリップの適性を見抜いていたのかもしれない。もしくは、たまたまフィリップに適性があったとも言える。

シエラを乗りこなすことに苦労したフィリップだったから、国王が「走竜を買い足す」と言ったときは、驚いた。

「もう一頭は誰が乗るのでしょうか」

思わずそう国王に質問した。すると国王が楽しそうな笑顔で答えた。

「フィリップが次の乗り手を選べ。そしてお前が乗り方を教えてやれ」

国王の命令は絶対である。

「氣立てのいい走竜など本当にいるのか怪しいものだと思っていたが。ルシィ姫の乗りこなしている様子を見たら、嘘うそではなかったな。要は乗り手の腕次第か」

フィリップはやつと階段を登り切り、賓客用の部屋に入った。

「さて、今夜は晩餐会だ」

それさえ終われば、フィリップは新しい走竜を連れて母国に戻ることになる。

晩餐会の会場には、不穏な空気が濃く漂っていた。

ルシイの婚約解消の噂が、参加した高位貴族たちにすでに広まっていたからだ。

いつもならルシイと共に参加するメルヴィンの姿がない。それが参加者たちの噂に勢いをつけていた。

重鎮たちも急な話に戸惑っていて、長いテーブルのあちこちでヒソヒソと話をしている。中には女王に聞こえない程度の声で批判的な意見を言う者もいた。

「女王陛下は少しルシイ姫を甘やかしすぎたのではないか」

「十八年間も婚約者でいたメルヴィンの立場はどうなるのだ」

そんな会話の合間に、チラチラとルシイに目を向ける。その視線に気づいて、ルシイは硬い顔で下を向いた。彼らの視線に気づいた女性ももう一人いた。ルシイの姉、クラリスである。

ヒックス王国に嫁いだ長姉クラリスが、今回フィリップに同行して初めての里帰りをしていた。

そのクラリスが妹の様子と会場の噂話に神経を苛立たせていた。

晩餐会が終わり、参加者たちが部屋を移動した。各人が好きな丸テーブルで酒と葉巻と談話を楽しむ時間である。

招待客たちが散ったのを確認して、クラリスが素早くルシイに近づいた。

「ルシイ、婚約の解消を申し入れたんですって？ どうしたのよ。あなた、メルヴィンのことを気に入っていたわよね？」

「そう……ですね」

「もしかして、原因はサシヤ？」

ルシイは思わずピクリと反応してしまい、そんな自分を忌々しく思う。

「ああ、やっぱり。だから注意したのに。サシヤとメルヴィンの両方に釘を刺しておけて書いてでしょう！」

「そうでしたね。でも、クラリスお姉さま、心が動いてしまった人に私が説教しても、心を変えることはできないもの」

二人は大理石の太い柱を背にして会話している。その柱の反対側でフィリップが柱にもたれて休憩していることに、二人は気づいていない。

「だからって、何もしないで逃げ出すの？」

「逃げるわけでは……。サシヤを愛しているメルヴィンを見たら、私はもう……」

「何か見たのね？ 何を見たのか言いなさい！ 私に嘘をつくのは許さないわよ」

顔がくっつきそうなほどクラリスが詰め寄った。こうなったクラリスにルシイが逆らえないのは、小さい頃からだ。

「森の中で、メルヴィンがサシヤを抱きしめていたんです。サシヤに『一緒に逃げましょう』と言

わかれて、『僕にはどうしようもない。家族が罰を受ける』って。メルヴィンは家族を守るために仕方なく私と結婚する覚悟なの。私は……何十年たつてもあの言葉を忘れられないと思う。それなら結婚すべきじゃないでしょう?」

「なんですって! メルヴィンがそんなことを言っていたの? へえ、そう。それで、婚約解消について、お母様はなんておっしゃったの?」

「お母様は私に二年間国を出るようにと。私は納得しています。メルヴィンとサシャのことは言っています」

納得していると言いながらもルシイの表情は暗い。クラリスは眉を吊り上げたまま長い時間絶句した。

「どう聞いても悪いのはメルヴィンなのに、なぜルシイが国を出されるわけ? あなたもあなたよメルヴィンに裏切られたのに黙って我慢した上に罰まで引き受けるなんて、愚かだわ」

「誰が悪いかははっきりさせても、誰も幸せになりませんから。メルヴィンが家のために私と結婚するつもりでいる以上、婚約の解消を申し出た私が罰を受けるのは当然です」

「そう。わかったわ。では私が今ここにいる全員にその話を広めるわ。裏切られたルシイが悪く言われるのは我慢ならない」

「やめてください! それでは私が黙って身を引いた意味がなくなるじゃありませんか! お姉さま、本当にやめてください!」

ルシイがクラリスの腕をつかんで離さない。動けないクラリスが呆れたような視線をルシイに向

けた。

「ルシイって昔からそうよね。お気に入りのアクセサリーやドレスをヘレンに横取りされても、ひと言も文句を言わなかった。見ていてじれったかったわ」

「あれはヘレンお姉さまと喧嘩けんかしてまで欲しい品ではなかったからです。正直言うと私、サシャと争ってまでメルヴィンと結婚したいとは思えなくなってしまったの」

クラリスがルシイをしばらく見つめた。

「腹立たしいけど、ルシイがそう思ったのなら仕方がないのかしら」

「この国にいればいろいろ噂されますし、聞きたくない話も耳に入ります。国外に出る話、私はそれで良かったと思っています」

フィリップは柱の陰からそっと離れた。

（浮気した相手を責めもせず、身を引くのか。そりゃまた物分かりが良すぎないか？ 王女様ならもっとわがままなのかと思っていたが。あんな王女もいるんだな）

フィリップが歩いていると、女王の従者が足早に近寄ってきた。

「ステグナン中尉、女王陛下がお呼びでございます」

「今行く」

レーイン王国からすると、とんでもなく高価な走竜を買ってくれるヒックス王国は上客だ。女王夫妻が最上級の酒を出してフィリップをもてなしている中、フィリップはさりげなく質問した。

「ルシイ姫が遊学なさるようですが、遊学先はもう決まっていますでしょうか」

女王アデラが一瞬驚いた顔をしたものの、すぐににっこりと微笑んだ。

「結婚前に他国を知る機会を与えたいと思ったのです。遊学が決まったのは近々きんきんの話で、まだ行き先は決まっています」

「でしたら、ヒックス王国はいかがでしょう。我が国もレーイン王国に負けず劣らず過ごしやすい国ですし、本場の走竜乗りの姫様にご指導いただければ、大変勉強になります。国王の許可を得られるよう、私が遊学のお話を持ち帰ります」

少し考えてから、アデラが優雅に微笑んだ。

「中尉はルシイが走竜乗りだと知っているのね。大げさなことにはせず、姉のクラリスのところへ遊びに行つて滞在する、ということにしましょう。あなた、それでどうかしら」

「それがいい。クラリスがルシイの近くにいるなら安心だよ、アデラ」

「では、中尉とクラリスが帰国する際にルシイを同行させてくれないかしら。中尉に迷惑がからないよう、私からオーギュスト国王に手紙を書きましょう」

女王の遊学が自分たちの帰国と同じ明日の出国とは思わなかったから、フィリップは驚いた。だが事情を聞いてしまった今は、出国を急がせたいのだろうと判断して何食わぬ顔でうなずいた。

「承知しました。ではヒックスに着くまで、私がクラリス様とルシイ様の護衛の責任者を務めさせていただきます」

「それはありがたいこと。今回お譲りするウーは、貴国にいるシエラの妹。相性は問題ないけれど、ヒックス王国に着くまではルシイにウーの世話をさせましょう。あの子は軍人たちよりも走竜の扱

いが上手です」

「軍人よりもですか。それは素晴らしいですね」

そこから先は当たり障りのない会話が続いた。

途中で従者がアデラに何事かを告げ、アデラとジョフロウは一時退席した。それに気づいたクリスがすかさず両親の後に続いて部屋を出て行く。アデラはクリスがついてくることに気づいたが、チラリと見ただけで何も言わない。

控えの部屋にはメルヴィンの父であるアウグスト・ルーデン侯爵がいた。アウグストの顔が引きつっている。

アデラがドアを閉めないようにと使用人に伝えたのは、クリリスに「部屋の外で話を聞いていろ」という意味だとクリリスは理解した。クリリスは部屋に入らず、ドアの外で聞き耳を立てた。

「どうした？ アウグスト」

「陛下、我が家に婚約解消の知らせが届きました。これは、いったいどういうことでしょうか」

アデラが無表情に問い返した。

「アウグストに思い当たる節はないのか？」

「ございません。メルヴィンは生まれた瞬間から、ルシイ様ひと筋に生きてまいりました。まもなく婚姻という段になって婚約解消と言われ、息子は打ちひしがれております」

「ひと筋で、打ちひしがれて、ねえ。お前はメルヴィンとサシヤがどの程度の付き合いか、知らないと言うのね？」

「メルヴィンとサシャ、でございますか？」

アウグストが戸惑った。その顔を見つめるアデラの表情は硬い。

他の貴族たちからアデラのところへ、何年も前から「メルヴィンとサシャは親しすぎるのではな
いか」「二人が密会しているのを使用人が見た」「森の中で二人だけで会っているのを見た者がい
る」という報告が届いていた。

（ルシイがメルヴィンとの結婚を楽しみにしていたから、近いうちにサシャを王都から離れた土地
へ嫁がせればいいと思っていたが。どうやらルシイは二人の關係に気づいてしまったらしい）

アデラはアウグストの顔を見ながら心でつぶやいた。

「そうか、お前は息子とサシャの關係を知らなかったか」

アウグスト・ルーデン侯爵は混乱していた。

王家から息子メルヴィンの婚約を解消する旨の知らせが来た時、理由が「ルシイ姫の遊学のた
め」と書かれていた。先刻までは「王家は我が家と我が息子を愚弄する気か！」と激怒していたが、
サシャの名前を出された今は嫌な予感しかない。

メルヴィンが子供だった頃、ルシイ王女との五歳の差はとても大きかった。

ルシイは常にメルヴィンの面倒を見る側だったし、メルヴィンは姉を慕うようにルシイに甘えて
いた。

しかしサシャは同じ年というだけでなく親同士が親しく交流していたから、真の幼なじみだ。

（サシャとメルヴィンの間に男女の情が生まれていたのだろうか。だとしたら大変な失態を犯した

のは我が息子と自分だ。監督不行き届きと言われたら返す言葉もない。しかし……メルヴィンとサシャの近くには常に使用人がいたはずだ。まさか二人だけで会っていたのか？)

アウグスト・ルーデン侯爵が赤くなったり青くなったりしているが、それを見ている女王アデラは冷静だ。

「親の欲目を承知で言うが、ルシイは思いやりのある娘だ。先日まで婚儀のドレスを嬉しそうな顔で眺めていたのに、突然婚約を解消してほしいと言ってきた。何かがあったのだろうね。アウグスト、本当に思い当たることはないか？」

アウグストが混乱して口を閉じたまましていると、長女クラリスが入ってきた。アデラは驚いた顔もせずに声をかけた。

「クラリス、大切な話をしている最中ですよ？」

「お母様、いえ、陛下。私はルシイの名誉のために、どうしてもお伝えしたいことがございます」

ルシイより七歳年上のクラリスは、姉であると同時に母のような気持ちでルシイを可愛がっていた。それだけにメルヴィンのやったことが許せない。ルシイには止められたが、(今ここで言わねばいつ言うのよ)と怒りに震えている。

「何かしら？」

「ルシイには止められましたが、申し上げます。メルヴィンは駆け落ちを提案したサシャを抱きしめて、『僕にはどうしようもない。家族が罰を受ける』と言ったそうです。それを見たルシイは二人を一切咎め^{とが}ないだけでなく、メルヴィンが罰を受けずに済むように自分の心変わりだと言ったの

です」

メルヴィンの父アウグストの手が細かく震え始めた。

女王と婚約している身で他の女性とそんな関係になっていたら、どんな罰を受けても文句は言えない。アウグストの顔色は青いのを通り越して紙のように白くなっていく。

アウグストがいきなり床に両膝と両手をついた。

「陛下！ メルヴィンを即刻廃嫡いたします！ 我が家と縁を切らせ、二度と関わらせません！
ですのどうか、どうかお許しを！」

女王と王配は互いに顔を見合わせ、同時にうなずいた。女王アデラの威厳ある声が室内に響く。

「お前が頭を下げるべきは私ではなくルシイだ。だが、あの子はそれを望むまい。自分の気持ちが変わったと言いつ張るルシイの思いやりを、無下むげにしたくない。だが、この先メルヴィンとサシヤは公式の場に出ることを禁ずる。私が二人の顔を見たくない」

それは名実共に二人の貴族人生の終わりを意味するが、家族と家の将来はどうにか救われる。

「陛下のご厚情に感謝いたします！」

「もうよい。下がれ」

「はっ」

アウグストがうなだれて退室し、人払いされた部屋は女王アデラ、王配ジョフロウ、長女クラリスの三人になった。

「お母様、ルシイの行き先は決まっていますのでしょいか」

「ヒックス王国に行かせることにしたわ」

「ヒックスに？　では、ルシイは我が家で預かります」

「そうしておくれ。ヒックス王国でそれなりの相手を見つけれられるといいのだけれど、多くは望まないことにしよう。あの子には傷ついた分、幸せになってほしい。それだけだわ。この件は……あまりに早く婚約を決めてしまった私たちにも責任があると思っています」

ここまで黙っていたジョフロウが力なくつぶやいた。

「ルシイには政治とは関係なく、思い思われる相手と結婚させたいと思っていた。国外に出さず、私たちの近くで幸せに過ごしてほしいと思っていたのだが……」

「お父様、私は政治的な配慮でヒックス王国に嫁ぎましたが、思い思われる幸せな人生を送っておりますわ」

「そうだなあ。国のために嫁がせたお前とヘレンは夫と相思相愛になれた。そうなってほしいと願ったルシイは相手と心が通わない。人の心は思い通りにならないものだよ。クラリス、ルシイは泣いていたのか？」

クラリスは悲し気に首を振る。

「ルシイはこんな時でも微笑んでいて……私、痛々しくて見ていただけませんでした」

「そうか……」

「私があちらで責任を持ってルシイを見守ります。ご安心ください」

「頼むよ。何かあったら私たちも力を貸そう」

フィリップが退室すると、アデラがルシイを呼び出した。

「遊学先は、ヒックス王国に決まりました。滞在先はクラリスの家です」

「承知いたしました」

「ルシイ、情け深いお前のことです。本当はメルヴィンと何かあったのでしょうか？」

少しの間視線を下に向けていたルシイが顔を上げ、笑顔で「いいえ」と否定した。アデラは娘がメルヴィンに裏切られてもなお、相手をかばおうとしていることに胸が痛んだ。

「お母様、私はどうしてもメルヴィンを弟のように思えてしまうのです。婚約解消は私のわがままです。申し訳ありません」

「そう……。お前の口から本当のことを聞きたかったわね。クラリスから事情を聞きました。メルヴィンは廃嫡され平民に落とされても文句は言えないことをしたわ」

「おやめください！ クラリスお姉さまったら！ そんなことをされたくないから言わなかったのに！」

「クラリスは貴族たちの前で婚約解消の本当の理由を公表しなかった。あれでも我慢していたのよ。あなたの優しさに免じて、メルヴィンの身分は剝奪しないから安心しなさい。それと……」

そこでチラリと隣のジョフロウを見た。

「ヒックス王国を提案してくれたのはステグナン中尉です。彼はヒックス王国で唯一の走竜乗りなの。ヒックス王国に行つて、彼に走竜の扱いを教えてやるといいわ」

「あの方がシエラの乗り手でしたか。わかりました。お母様、私が抜けても公務の手は足りませんか？」

「ルシイったら。こんな状況でお前が公務の心配なんてしなくてもいいのよ。モーリスも第一王子として公務を任せられる年齢だもの、何とかあります」

ジョフロウが父親の顔になって話を引き継いだ。

「ヒックス王国でなにかあっても、泣き言を言わずに頑張るのだよ」

「はい、お父様」

「怪我や病気には気をつけなさい」

「はい、お母様。気をつけます」

「お前の優しさがお前自身を傷つけないことを願っています。ルシイ、もしヒックス王国で傷つけられることがあったら、引き下がってはなりません。我がレーイン王国の王女として誇り高く行動しなさい。いいわね？」

「はい、お母様」

翌日、ルシイは走竜ウーに乗って国を出た。

クラリスは馬車での移動だが、ルシイは自らウーに乗って移動することを希望した。

出発前、ルシイは護衛を務めるヒックスの軍人たちに「手間をかけますね」と笑顔で声をかけ、軍人たちを恐縮させた。責任者のフィリップにも「よろしくお願いします」と笑顔で挨拶をした。

フィリップはそんなルシイの様子を複雑な思いで見っていた。

(婚約者に裏切られた上に侍女も同行しない出国になったようだ。そんな状況で俺たちにまで気を遣うことはないのに。どこまでもいい子で……生きづらそうな人だ)

一行は出発し、街道を進んでいる。

ヒックス王国に向かう隊列の中ほどに走竜ウー。その背中にはルシイが乗っていて、フィリップは馬に乗ってウーの隣を歩いている。

クラリスは馬車でルシイとおしゃべりしながら旅をするつもりだったから、不満顔だ。

「どうしてルシイがウーに乗っているの？ そのために中尉がわざわざ来ているのに」

「この中でウーと一番仲がいいのは私ですから。ウーは慣れない環境で不安だと思っんです。道中で何かあつては困るので、中尉にお願いして旅の間だけは私がウーを引き受けることにしました。お母様もそうおっしゃったそうよ」

「はあ……。わかったわ。残念なこと」

譲る気配のないルシイに、クラリスはため息をついた。

ルシイが「よろしくね、ウー」と言つてウーの背中に伏せると、ウーが振り返つて匂いを嗅ぐ。

ルシイはそのウーの鼻面を優しく撫でた。

横目で様子を見ていたフィリップの目に、ルシイの笑顔が映る。

(真面目が服を着ているような王女様だが、笑うと幼くて愛らしい感じになるんだな。本当はこっちが素なのか?)

「ウー、ヒックス王国まで私と一緒にだからね。安心して」

「カカカッ」

威嚇するときは腹に響くような大音量で叫ぶウーだが、甘えているときは喉の奥から可愛らしい声を出す。フィリップに付き従ってきた軍人たちが、ルシイとウーのそんな様子を見ていた。彼らは走竜に近づかないものの、興味はある。

「走竜はあんな甘えた声も出さんだな。中尉が乗っている走竜はあんな鳴き方をしていたか？」

「いや、俺は聞いたことがないな」

「やっぱり走竜国の王女様はすごいな。あの走竜がまるで子犬みたいに懐いている」

ヒックス王国の軍人たちは馬を進めながら、そんな話をしている。

聞こえてしまったフィリップは考え込んだ。確かにフィリップが乗っているシエラはあんな声で鳴いたことがない。ヒックス王国で唯一の走竜乗りとしては、（シエラは俺に心を許していないのか？）と心配になった。

一行は順調に距離を稼ぎ、休憩時間になった。ルシイは地面に伏せて休んでいるウーの首筋を撫でていて、ウーは気持ちよさそうに目を細めている。

フィリップがルシイに近寄り、笑顔で話しかけた。

「仲良しで羨ましい限りです。走竜と仲良くなるコツがあったら教えていただけませんか」

フィリップを見上げたルシイが微笑んだ。ルシイはフィリップがシエラと仲良くなりたいたいと思っ
てくれていることが嬉しい。

ルシイは（いい人だし、いい走竜乗りね）と心でつぶやき、話を始めた。

「個体によって喜ぶことは多少違いますが、どの走竜も人間に優しい声で話しかけられることが好きです」

「王女様は頻繁に話しかけるのですね？」

「ええ。走竜は母性愛の強い動物で、母竜は子竜に優しく語りかけて育てます。だから私も母竜の真似をするの」

話をしながらも、ルシイはウーを撫でている。

「なるほど。孵化した時から人が関わっているレイイン王国ならではの知識ですね。シエラは穏やかな性格と聞いていたのですが、大人の走竜に主と思ってもらうのは、なかなか大変でした。王女様は走竜が怖くないのですか？」

「今ほもう怖くないわ。私、走竜の美しくて強いところが大好きなの。初めて触れた走竜はリュートでした。気性が荒いと言われていた子だったし体の大きい子だから、最初は恐々触れましたが、なぜかリュートは最初から私に懐いてくれたんです」

「相性でしょうか」

「そうかもしれません。まだ少女だった私はリュートの美しさにひと目惚れしました。この子がいい、この子に乗りたいたいと思いました。それをリュートが感じ取ってくれたのかもしれない」

それまで座っていたウーがゆっくり立ち上がった。遠くにいる牛が気になったらしい。

ルシイは取り付けられている鎧の革ベルトに手をかけた。そのままジャンプして鎧につま先をか

け、次の瞬間にはウーにまたがった。流れるような動作の美しさに、フィリップは目を奪われた。

「ウーに水を飲ませに行きますが、中尉もウーに乗りますか」

「はい。ぜひ」

ルシイが首を軽く叩くとウーが再び低い姿勢になり、フィリップがルシイの後ろに乗った。

「一人用の鞍なので、私にしっかりとつかまってください」

「失礼します」

ルシイよりも頭ひとつ背の高いフィリップが背後に乗り、ルシイの腰に手を回した。

長いこと二人乗りをしていなかったルシイは、フィリップに後ろから包まれるような形になってから、内心で慌てた。

(そうだった。二人乗りすればこうなることをすっかり忘れていたわ)

それでも平然とした顔を作ってウーを操り、川に向かう。

川に着くと軍馬たちは水を飲み終わっていたらしく、もう誰もいない。川岸でウーから降り、二人は木陰に腰を下ろした。

鞍を外され「行っておいで」と声をかけられたウーは川に入り、気持ちよさそうに水浴びを始めた。バシャバシャと水しぶきをあげて左右に転がっている。

「私のことは王女様ではなく、ルシイと呼んでください。遊学も、本当のところは婚約解消を願った罰で行くのです」

「罰でもなんでも、二年間は自由ですね」